オリバー・ツイスト
チャールズ・ディケンズ 作
山本史郎・森藤亮史 訳
上
LONDON
70
MILES
オリバー・ツイスト
チャールズ・ディケンズ 作
山本史郎・森藤亮史 訳
下

オリバー・ツイスト

上

チャールズ・ディケンズ 作

山本史郎・斎藤兆史 訳

オリバー・ツイスト 上

《目次》

第1章 オリバー・ツイストはどこで、どのように生まれたのか 12
第2章 オリバー・ツイストの成長と教育と食事 17
第3章 オリバー・ツイストは、暇で収入がいいというわけにはいかない職につきそうになる 39
第4章 オリバーは別の職について社会に出る 55
第5章 オリバーは新しい仲間とまじわり、はじめて葬式に行って、主人の仕事がいいものではないことを知る 69
第6章 オリバーは、ノアにばかにされて立ちむかっていき、いささかノアをおどろかせる 89
第7章 オリバーは反抗的な態度をとりつづける 99
第8章 オリバーは歩いてロンドンにたどりつき、道でふしぎな若紳士に出会う 114
第9章 愉快な老紳士とその有望な生徒たちの話の続き 131
第10章 オリバーは新しい仲間たちとさらに親しくつきあうようになり、とても手いたい経験をする。短いけれども、この物語の中でとても重要な章 145
第11章 警察裁判所判事のファング氏について、彼がどのように正義の裁きをくだすか、ささやかな例をもって示す章 154
第12章 オリバーは生まれてはじめての手厚い世話をうけ、話はまた陽気な老紳士とその若い仲間たちにもどる 168
第13章 賢い読者のみなさまに新しい登場人物を紹介し、それにあたって、この物語に関係のあるいろいろの愉快なできごとを語る 186

第14章 ブラウンロウ氏の家で世話になっているオリバーの話の続きとお使いに出たオリバーについてグリムウィッグ氏のおどろくべき予言について 201
第15章 愉快な老ユダヤ人とナンシー嬢がいかにオリバー・ツイストをかわいがっていたか 220
第16章 ナンシーにつかまったあとでオリバーがどうなったか 233
第17章 オリバーの運勢はひきつづき凶。一人の偉大なる男がロンドンにやってきて、少年の評判をいっそう下げることになる 251
第18章 オリバーは、りっぱな仲間たちから学びながらどのように暮らしているか 268
第19章 すごい計画が議論され、それを実行にうつす決定がなされる 283
第20章 オリバーがウィリアム・サイクス氏にひきわたされる 301
第21章 遠征 316
第22章 押し入り 327
第23章 バンブル氏とある婦人の会話を記し、教区役人でも弱い点があることを述べる 341
第24章 ほとんど取るにたらぬ短い章ながら、物語の重要な鍵がかくれている 356
第25章 ふたたびフェイギン氏とその一味について 367
第26章 謎の人物が登場し、この物語にとって重要な多くのできごとがおきる 380
第27章 そっけなく取りのこした一人の婦人に関する、つぐないの気持ちをこめた続報 403
訳者解説 418

オリバー・ツイスト（上）
この本の登場人物

オリバー・ツイスト……この本の主人公。救貧院で生まれ、養育院で育つ

バンブル氏……オリバー担当の教区役人。救貧院と養育院を行ききする

マン夫人……オリバーの生まれた町の養育院をとりしきる

コーニー夫人……オリバーの生まれた救貧院の家政婦長

ディック……養育院でのオリバーの友人

サワベリー氏……町の葬儀屋。オリバーを下働きとして買いとる

ノア・クレイポール……葬儀屋の助手。オリバーを執拗にいじめる

シャーロット……葬儀屋の下働きの女性

アートフル・ドジャー（通称）……オリバーをロンドンに誘い、フェイギンに紹介する名うての少年スリ。本名ジャック（ジョン）・ドーキンズ

フェイギン……ロンドンで子どもたちに集団スリをはたらかせる老人

ビル（ウィリアム）・サイクス……フェイギンの友人。ならず者

ブルズ・アイ……ビルの連れている犬

ナンシー……フェイギンのところに出入りする。ビルの愛人

ベット……通称ベッツィ。ナンシーの友人

チャーリー（チャールズ）・ベイツ……通称ベイツ坊や。フェイギンの仲間

トム・チトリング……フェイギンの仲間

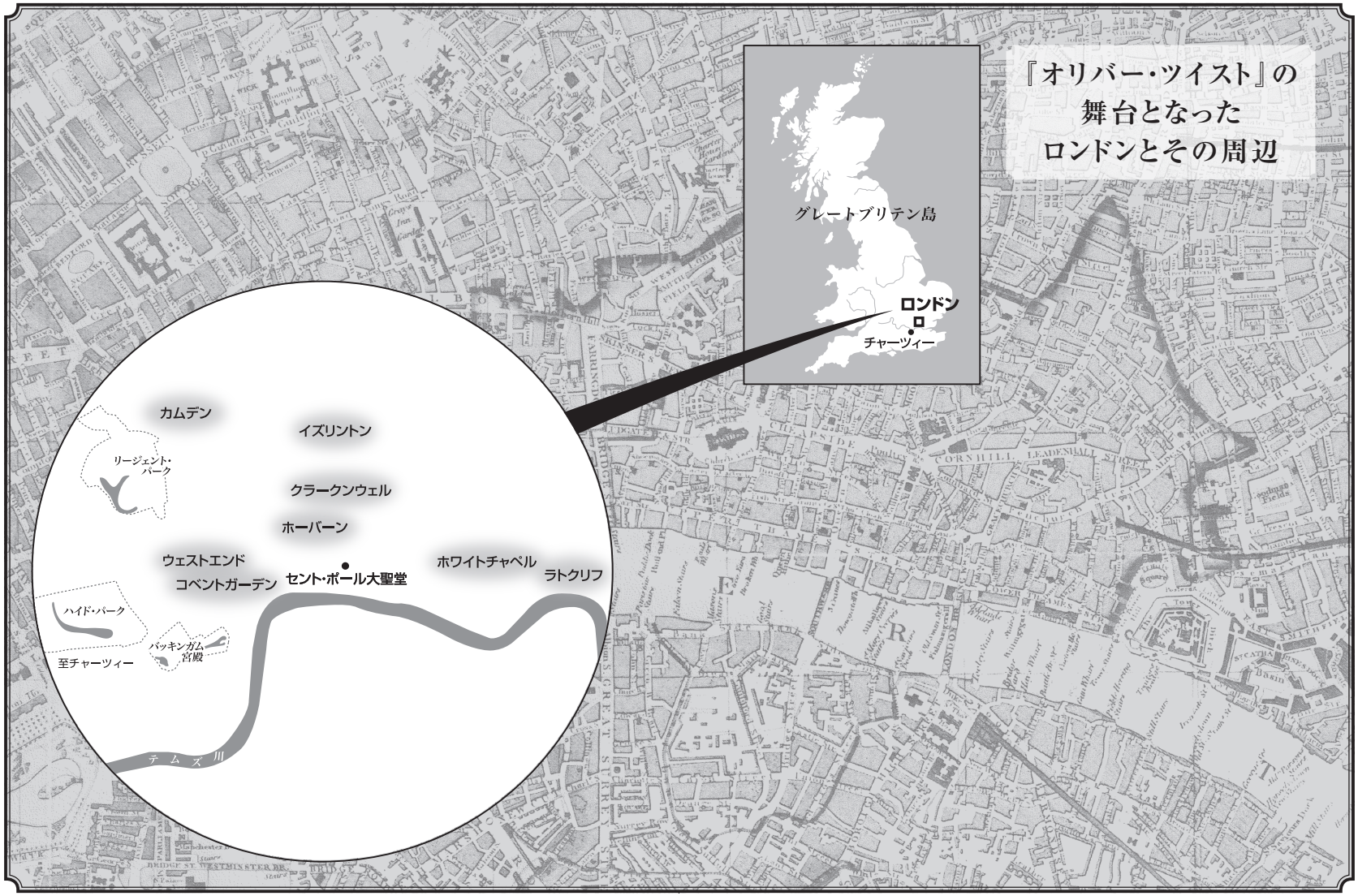
トビー・クラキット……フェイギンの仲間

モンクス……謎の男、オリバーを憎む。

ブラウンロウ氏……スリ仲間からオリバーを救う老紳士

ベドウィン夫人……ブラウンロウ家の家政婦

グリムウィッグ氏……ブラウンロウ氏の古い友人でオリバーを疑う


『オリバー・ツイスト』の
舞台となった
ロンドンとその周辺
グレートブリテン島
ロンドン
チャーツィー
カムデン
イズリントン
リージェント・パーク
クラークンウェル
ホーバーン
ウェストエンド
コベントガーデン
セント・ポール大聖堂
ホワイトチャペル
ラトクリフ
ハイド・パーク
バッキンガム宮殿
至チャーツィー
テムズ川

オリバー・ツイスト〈上巻〉

Oliver Twist
by
Charles Dickens 1838

〔カバー・本文さし絵〕寺崎百合子
〔装丁〕ライムライト
〔本文デザイン〕田中明美

扉のイラストレーションはイギリスでの初版時のジョージ・クルックシャンクによるものです。

第１章

オリバー・ツイストはどこで、どのように生まれたのか

イギリスのとある町でのこと。町の名はあえて記さないほうがよいだろうし、仮の名で呼ぶこともしないでおこう。大きかろうが小さかろうがたいていどの町にも存在するある施設が、この町にもあった。すなわち救貧院のことだ。この救貧院で一人の赤ん坊が生まれた。それがいつのことなのか、日付をここに書きしるすのはやめよう。すくなくとも物語のいまの段階では、読者にとってさして大事なことだとは思われないからだ。それはともかく、この章の見出しに登場する人物はそこで誕生したのである。

教区の医者の手でこの悲しみと苦しみの世界に引きだされはしたものの、しばらくの間この赤ん坊は、おそらく名前すらつかないうちに死んでしまうだろうと思われていた。もちろん、そうなっていたとしたら、この物語が書かれることもなかったはずである。また仮に書かれたとしても、二、三ページのもので、いつの時代、どの国で書かれたものよりも簡潔で忠実な伝記になりえたことだろう。

赤ん坊が救貧院で生まれたということ自体が、およそ人がうらやむような最高の幸せで

あったというつもりは毛頭ない。ただ、この一件においては、これがオリバー・ツイストの身におこりうる最高の事態だった。すなわち、こういうことである。はじめオリバーは、なかなか呼吸という大事な仕事を自分でひきうけようとはしなかった――呼吸というのはたしかにやっかいな営みではあるものの、私たちがすこやかに暮らすためには欠かすことのできないものとされているものだ。しばらくの間、オリバーは、ぼろくずの小さな敷き布団の上でいきみながら、生死の境をさまよっていた。なりゆきからすれば、むしろあの世に行きかかっていた。さて、この短時間の間、もしオリバーが世話焼きの祖母や、心配顔の叔母や、経験豊かな産婆や、医術に長けた医者たちにとりかこまれていたとしたら、あっという間に死んでいたにちがいない。しかしながら、じっさいにオリバーのそばにいたのは、めずらしくビールをふるまってもらったために頭がもうろうとした貧しい婆さん、そしてこのような仕事を契約でうけおっている教区医者だけだった。だからオリバーは一人で無慈悲な運命を闘いぬき、手足をいくどかばたばたさせた後、すうっと息を吸いこみ、くしゃみをし、三分十五秒以上もの間、声という便利な道具をさずけられなかった男の赤ん坊がだしうるかぎりの大声で泣きさけぶことによって、教区のお荷物がまた一人増えたことを救貧院にいる人間たちに知らせたのだった。

オリバーが肺を思うがままに、正しくつかっていることをはじめて証明したとき、鉄の

寝台の上におざなりにかけられたつぎはぎの掛け布団がごそごそとうごいた。若い女の血の気のない顔が枕からもちあがったかとおもうと、その口からとぎれとぎれの弱々しい声がもれた。「子どもの顔を見てから死にたいわ。」

医者は、顔を暖炉に向けてすわったまま、両手を火にかざして温めてはすりあわせていた。けれども若い女が言葉を発すると、立ちあがって枕もとに行き、教区医者にしてはやさしい声でいった。「あんた、死ぬなんていうのはまだ早いよ。」

「そうさ、だめだよ！」と看護の婆さんが口をはさみ、あわてて緑のガラス瓶をポケットにしまいこんだ。その中身を、さっきからさもおいしそうに部屋の隅でちびちびとやっていたのだ。「そうさ、あたしくらいの歳まで生きてさ、ねえ先生、十三人も子どもを産んで、そのうち二人を残してみんな死なれてみなよ。そんで、死ななかった二人と救貧院で暮らしてみれば、そうさ、そんなふうに悲観したりはしないさ！　考えてもみなよ、あんた母親になるんだよ。ねえ、元気をだしなよ。」

母親になることを考えさせてなぐさめようとしたものの、どうやらしかるべき効果は得られなかったようだ。女は首を振り、子どもの方へ手をのばした。

医者はその子を女の腕の中に置いた。女は、その冷たくまっ青な唇を我が子の額に強くおしあてた。それから、自分の顔を両手でなでまわし、やみくもにあたりを見まわし、

身ぶるいをし、布団にしずみこみ――そして、死んだ。医者と婆さんはその胸を、手を、額をさすったが、血の流れは永遠に止まってしまった。二人は希望となぐさめの言葉をとなえた。だが、もはやあとの祭りだった。この女がもっと早く希望となぐさめに出会っていれば、こんなことにならなかったのだが。

「こりゃ終わりだな、婆さん！」ついに医者がそういった。

「ええ、かわいそうだけど、しかたがないね！」と婆さんはいい、前かがみになって子どもを抱きあげ、そのとき枕の上にころがりおちた緑の瓶のコルク栓をひろいあげた。「かわいそうにねえ！」

「子どもが泣いたらな、婆さん、遠慮なくよんでくれ」と医者はいい、ゆっくりと手袋をはめた。「相当手がかかると思うよ。面倒だったら、重湯をあたえておけばいい」医者は帽子をかぶり、ドアに向かうとちゅう、ベッドのわきでしばし立ちどまり、こうつけくわえた。「きれいな娘だったね。どこからきたんだろう？」

「昨日の夜、連れてこられたんですよ」と老婆は答えた。「救貧院委員の命令でね。行き倒れになっていたところを発見されたんです。だいぶ歩いてきたらしく、靴がすりきれていたんですって。だけど、どこからきたのか、どこに行こうとしていたのかは、だれにもわかりません。」

医者は亡骸の上にかがみこみ、その左手を持ちあげた。「よくある話だ」と医者は首を振りながらいった。「結婚指輪をしていないものな。まったく！　おやすみ！」

医者は夕食をとるために帰っていった。そして婆さんは、もう一度緑の瓶の中身をあじわってから暖炉の前の低い椅子に腰をかけ、それから赤ん坊にうぶ着を着せはじめた。

衣装が人の見かけをどれほど変えるかを実証してみせた人間がいたとすれば、この幼きオリバー・ツイストこそまさにその人間であった。それまでからだにかかっていた唯一の布地である毛布にくるまっているかぎり、貴族の子も乞食の子もかわらない。知らない人が見たら、いくら意地悪に目をこらしても、この赤ん坊の身分をいいあてることなどむずかしかっただろう。だが、さんざんつかわれてすっかり黄ばんだ古いインド綿布の服に身をつつまれたとたんに、紋章と札をつけられたも同然、たちまちしかるべき身分におちついてしまった。いずれは教区の子から救貧院の孤児となり、おとなになるといつも腹をすかせてつまらない仕事をこなす貧しい境遇の人間となり、人にこづかれなぐられながら暮らしをたて、万人にさげすまれ、だれからも情けをかけられることがないだろう。

オリバーは元気に泣いた。もしも自分が孤児であり、教区委員と救貧院委員たちの温情にすがることになることを知りえたならば、もっと大きな声で泣いたことだろう。

第2章　オリバー・ツイストの成長と教育と食事

それからの八か月から十か月ほど、オリバーは、人をうらぎり、だましあう制度の犠牲者だった。彼は、人の手にあずけられて育った。孤児として生まれたこの子どもがお腹をすかせ、あわれな状況にあることは、しかるべく救貧院の役員から教区の役員につたえられた。教区のおえらいさんは救貧院のおえらいさんに向かって、おごそかな態度でこうたずねた。〈院〉に住みこんでいる女性のなかで、オリバー・ツイストに必要な安らぎと栄養をあたえることのできる状態にいる者はいないのか、と。救貧院の役員たちは、そのような女はいないとうやうやしく答えた。これをきいた教区のおえらいさんたちは、人の道にかなった、なんともやさしい決断をくだした。すなわち、オリバーを〈養育院にあずける〉という決断である。別の言い方をすると、三マイル*ほどはなれた場所にある救貧院の分院に入れるということだ。そこでは、貧民救助法にひっかかった二、三十人の悪ガキどもが一日中床の上でごろごろしている。食べすぎや着すぎなどとは縁がなく、しごくけっ

＊一マイルは約一・六キロメートル